

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	瀬川海
2. 審査委員	主査：（滋賀大学教授）大平雅子 副主査：（岐阜大学教授）平澤紀子 委員：（岐阜大学教授）春日晃章 委員：（滋賀大学教授）松田繁樹 委員：（滋賀大学教授）與倉弘子
3. 論文題目	身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担軽減
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻 生活・健康系教育連合講座 瀬川海から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時：令和6年1月22日（月）18時00分～19時00分 場所（形式）：ZOOMによるオンライン形式</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>（1）論文の構成</p> <p>第1章 序論</p> <p>第2章 先行研究</p> <p>第1節 子どもがスポーツ活動をサポートする保護者から受ける利益と不利益</p> <p>第2節 子どものスポーツ活動をサポートする保護者自身の利益と不利益</p> <p>第3節 障害者のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する運動</p> <p>第3章 研究の目的と研究課題</p> <p>第1節 問題の所在と本研究の目的</p> <p>第2節 本研究の構成</p> <p>第3節 用語の解説・定義</p> <p>第4章 研究Ⅰ：保護者の負担を軽減する要因分析</p> <p>第1節 目的</p> <p>第2節 方法</p> <p>第3節 結果と考察</p> <p>第4節 総合考察</p>

第5章 研究Ⅱ：保護者の負担を軽減するプログラム検証

第1節 目的

第2節 方法

第3節 結果と考察

第4節 総合考察

第6章 総合討論

第1節 身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段

第2節 本研究の限界

第3節 今後の課題と展望

第4節 結論

引用参考文献

障害児を養育する保護者は、多忙な日々の生活でストレスを感じやすい。さらに、障害児のスポーツ活動のサポートする保護者においては、子どもの運動の自主練習の付き添い、運動指導、試合の帯同、財政面の負担など、スポーツ活動をサポートする時にも負担を抱えることになる。しかし、保護者は障害児のスポーツ活動をサポートする方法が分からないことや、負担を軽減するための効果的かつ実用的な手段は未だに見つかっていない。そのため、手探りでサポートすることしかできず不安を感じやすいことや、日常的な負担とうまく付き合うことができていないことが問題である。そこで、障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段を検討することを、本研究の目的とした。なお、本学位論文では、障害児の中でも身体障害児を中心として検討した。本学位論文は6つの章から構成される。

第1章の序論では、身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減するために、多忙を極める保護者でも取り組みやすい手段を検討する重要性を示した。

第2章の先行研究においては、第1節. 子どもがスポーツ活動をサポートする保護者から受ける恩恵と弊害、第2節. 子どものスポーツ活動をサポートする保護者が受ける恩恵と弊害、第3節. 身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する運動、に関する研究について整理し、保護者の負担を軽減するために効果をもたらすことが期待される要因をまとめた。

第3章の研究の目的と研究課題では、序論と先行研究を基に、これまでの問題の所在を明らかにし、本研究の目的を設定した。また、本研究の目的を検討するにあたり、研究課題を設定した。

第4章の研究Ⅰでは、スポーツ活動に取り組む身体障害児をサポートする保護者の負担を軽減する要因を検討した。「パラ水泳に取り組む身体障害児の競技に対するモチベーションと保護者が身体障害児の競技活動をサポートする姿勢の変容プロセス」を明らかにし、身体障害児のスポーツ活動を長くサポートする保護者のサポート姿勢と保護者が長くサポートする身体障害児のモチベーションを高める要因を解明した。その結果、保護者が子どもの変容を認識する姿勢や、子どもが取り組む競技について理解する姿勢が、身体障害児のスポーツ活動を長くサポートする重要な姿勢であることが示された。また、身近な人の継続的なサポートを認識すること、アスリートとなったことを自覚すること、社会性の成長を実感すること、は身体障害児のモチベーションを高める要因であることが示唆された。研究Ⅰで明らかになったサポート姿勢と身体障害児のモチベーションを高める要因を、保護者は知っておくことで、手探りでサポートすることなく、

エビデンスに基づいたサポートをすることができ、安心感を持つことができる可能性がある。加えて、同じ境遇の保護者同士がコミュニティを形成することや、子どもの成長に役立つ情報を得る機会は、保護者の負担を軽減する重要な要因となると考えられた。

第5章の研究Ⅱでは、短期的な親子運動プログラムが、身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者のソーシャルサポート（以下、SS）、セルフ・エフィカシー（以下、SF）、運動への態度やストレスにもたらす効果を検証した。さらに、プログラム後の運動継続性を検討した。身体障害児3名と母親3名を対象に、2日間、1日1回30分の親子運動を実施した結果、3名の保護者のうち2名は、SSを高めることができ、ストレス値の高かった1名はストレスを軽減することができた。さらに、運動への態度について、1名は感情的態度に肯定的な変化が生じ、手段的態度は2名が向上した。SFについて、1名はポジティブな効果を得ていたが、2名はポジティブな効果だけでなくネガティブな効果も得ていた。また、3名のうち2名の母親が、親子運動の1ヵ月半後でも、可能な範囲で自らの生活に合わせて、親子運動を継続していた。これらの結果は、似た境遇の親子同士でほっとする運動環境や、周囲の人に気を遣わない環境、マイペースに参加しやすい環境を設定することで、SSが向上しやすかったと考察された。さらに、親子運動時に、他の身体障害児の運動時の配慮を学ぶことで手段的サポートが高まることや、親子一緒に運動する楽しさを味わうことで、子どもへの愛情を高め情緒的サポートが向上する可能性が示された。

第6章の総合討論では、得られた結果から明らかになった知見を基に、身体障害児のスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減する手段に関する考察を深めた。また、今後の課題や展望についてまとめた。

2. 審査経過

(1) 研究の独創性及び発展性

本研究では、パラ水泳に取り組む身体障害児を長くサポートしてきた保護者のサポート姿勢を明らかにすることができた。また、保護者のサポートする姿勢の変容プロセスから、同じ境遇の保護者同士がコミュニティを形成することや、子どもの成長に役立つ情報を得る機会は、保護者の負担を軽減する要因となる可能性が示唆された。さらに、身体障害児を養育する保護者同士が親子運動でつながりを得ることで、他の身体障害児の運動時の配慮を学び、手段的サポートが高まること示された。これらは今まで解明されてこなかった知見であり、独創性は高い。また、パラ水泳以外のパラスポーツ他種目においても、保護者の負担を軽減する手段として活用できる可能性がある。よって、多くのパラスポーツ活動をサポートする保護者の負担を軽減することが期待され、発展性があると考えられる。

(2) 学校教育実践への貢献および社会貢献

本研究で得られた知見は、特別支援学校の授業参観などで保護者が来た際に、親子で一緒に学ぶような授業に活用することができる。さらに、親子運動の内容は、特別支援学校の教員と児童と一緒に運動するような授業で活用することができる。また、多忙な保護者でも取り組みやすい実用的な手段を示したことは、本研究の大きな成果である。将来的に保護者の負担を軽減し、多忙な保護者でも身体障害児のスポーツ活動のサポートとうまくつきあう手段としての一助になる。その結果、パラリンピック競技大会を目指すようなパラスポーツ選手の育成にも貢献できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、瀬川海の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。